

誤解とその他

キム・ヒョンソク

- 1) 誤解
- 2) Tシャツについて
- 3) 12月26日
- 4) 噛む犬
- 5) ファミリーレストラン
- 6) 夏のおわり
- 7) 私に言ってみて
- 8) 犬について
- 9) 映画を見た後
- 10) 坂本龍一
- 11) 虫
- 12) 軽い落ち葉
- 13) Man of war
- 14) 席
- 15) sheets
- 16) 髭と髭剃り
- 17) ブイーの話
- 18) 石とその下の虫
- 19) 浴室のカビ

1) 誤解

私は1990年5月26日、大韓民国の木浦にあるキリスト産婦人科病院で生まれた。その後、光州へ引っ越し、日本へ渡ってきた2014年5月までは、私はずっと光州で暮らした。私の一番古い記憶は、3歳の時の記憶である。結婚式場の中での記憶であり、新郎と新婦は私の父と母であった。二人はお祝いの言葉を聞くため、式場の前で立っていた。私は、最も前の座席で、年上のいとこの膝の上に座っていた。父と母のそばに行きたくて、暴れてみたが、年上のいとこが私をつかんで離してくれなくて、非常に悲しかった記憶である。

実はこの記憶には面白いところがあって、私が高校生の時までは、この事実が夢だと認識していた。何度かこのような記憶に対して両親に事実の確認を試みたが「面白い夢を見たんだね」と言って、うやむやにやり過ごされた。

その後、偶然、両親の結婚式の写真を見ることになり、右下に書かれた日付が93年だったということが分かった。

90年代初め、父は大学を卒業し、腕時計を訪問販売する社員として仕事をするようになったが、長くは働かず、1年くらいでやめることになった。その後、父は祖父からお金を借りて、高校の近くに小さな文房具屋を開くことになった。店には文房具だけではなく、お菓子や、当時流行っていたアイドルのアルバムなども販売していた。店の奥側には、流し台があるワンルームのような部屋があって、そこで3人で食べたり、寝たりという暮らしをしていた。夜ご飯はいつも父が店を見ている間に母と食べていた。

私は、家から一番近い幼稚園に通うことになった。消防訓練をしたことが、幼稚園の数少ない記憶の中で、最も鮮明な記憶の一つである。その日は天気が良かった。みんなが運動場に集まり、運動場の真ん中には、みすばらしいドラム缶と捨てられた木材のようなものが置かれていた。消防隊員は、そこに火をつけては、消火器を使って火を消すことを繰り返した。初めて大きい火を見た。

初めて異性に興味を持ち始めた。

小学校に入学した。1年生の担任の先生は、かなり権威主義者であった。宿題や言うことに対して、言う通りにならない場合は、体罰を行っていた。私はクラスの投票で班長を務めることになり、私はそれを自ら誇りにしていた。私が覚えている班長の役割は、たまに担任の先生が席を外す間、先生の代わりに教卓の前に立ち、先生が戻って来るまで、クラスの子供たちに静かな状態を維持させることだった。騒いだ子がいたら、私はその子の名前を黒板に書き、先生が戻ってきたときは、その子は体罰を受けることになっていた。体罰は細くて長い棒で手のひらを叩くものだった。

私は大学を卒業した後、偶然家族と一緒に私の小学生の頃の話をするようになった。母親からは、当時の学級委員の母親たちが、みんなでお金を集め、そのお金を担任の先生に渡す風潮があったと言う話を聞くことができた。母もそれに協力したと言った。

父と私はその理由を聞くと、「みんなそうしていたから、仕方なかった」と言う答えだった。

小学生3年生になったとき、自然に親しくなった女の子がいた。異性として好きだったわけではなかったが、友達として一緒に過ごす時間が多かった。その女の子と二人で一緒に遊んでいると、時々、誰かから付き合っていると誤解を受けたりして、気持ちがもやもやしていた。

私の家と学校の間には、街の人々が簡単に散歩や運動ができる公園があった。私はいつもその公園を歩いて登下校するのが好きだった。春には、学校からの帰りに、公園に咲いていた小さな青い花を折って母にプレゼントしたりした。

ある日は、学校に行く途中、公園で死んでいたスズメを見た。人がよく通るところで死んでいたため、人が通らなさそうなところまでスズメを運び、スズメを埋めてあげた。学校帰りに、死んだスズメが埋め込まれた場所をしばらく眺めた。その日は一日中、死んだスズメのことを考えた。

4年生の時書いた絵日記には、光州ビエンナーレで見た作品と、それに対する感想が書かれていた。人体彫刻像が2つが並んで立っていて、男のような体をしているが、性器の部分が女性の性器になっている彫刻像と、女性のような体をしているが、性器の部分が男性の性器になっている彫刻像であった。私は絵日記にそれらの絵を描き、おかしかったと書いた。「おえっ!」と書いた。

私は小学校の5年生まで、ずっと班長をしてきた。4年生が終わる頃、両親が運営していた店の大家が、家賃を上げるという要求をしてきた。経済的に負担を感じた二人は、引っ越しを決心することになった。引っ越し先は、住んでいたところから車で15分ほど離れたところで、新しくできた小学校の前だった。仲良くしていた友達と離れなければいけないことに、特に大きな寂しさを感じてはいなかった。

新たに引っ越して来たところは、まだ都市開発が終わってなくて、家の周りには空き地が多かった。良い印象も悪い印象もなかった。ただ、自分の部屋ができて、それが少し嬉しかった。そしてこの頃になって、私は自分の家が、経済的に余裕がある家ではないということがわかった。

私はここで8年間過ごすことになり、その間にこの街には、3階から8階程の、外壁が大理石でできた建物が、たくさん入るようになった。

ある日、友達の家遊びに行った。その友達は20階のマンションの15階に住んでいて、友達が何かを取りに家の中に入っている間、私は15階の廊下で友達が出るまで待っていた。15階と16階の間には窓があって、私はそこから飛び降りてみようかと思った。片足を出して、他の足も持ち上げようとしたら、怖くなって、やめた。

中学生になった私は制服を着るようになった。成績表をもらうようになった。インターネットで、ポルノ映像を初めて見た。

私が通っていた中学校は、男女共学だったが、クラスは性別で分かれていた。私が1年生の時、1年生の男子のクラスは、2年生の女子のクラスと同じフロアだった。2年生の女子の先輩の中一人

が、私のことを好きだった。当時、私は別に好きだった同級生の女の子がいたが、その先輩の気持ちや断る方法、あるいは断る理由がよく分からなかったため、付き合うことになり、長くは続かずに別れることになった。

同級生の中では、小学校の時からいじめられてきた子がいた。鼻炎があり、いつも他の子より、多くの鼻水を流した。中学生になっても彼は鼻炎が治らず、たくさんの鼻水を流し、同級生たちはそれにかからなかった。一度、彼は、同級生たちのいじめに対して耐えられなくなり、カッターナイフを取り出し、周りを脅かした。

ある日は、彼と私の間に、何かのトラブルがあり、喧嘩をしたことがあった。誰も喧嘩を止めず、チャイムがなる前の5分間、私は彼と喧嘩をやり続けた。戦いを見物した子たちの中で一人は、私が戦ってる姿を真似して笑ったりした。恥ずかしかったが、私よりも力が強い子だったので、それについて私は何も言うことができなかった。

高校を卒業した後、友達から彼の話をついに聞くことができた。当時のことについて、会いに行き謝りたいと思ったが、偽善だと思ってやめた。

私は中学生になってからはたくさんの嘘をついた。自分が不利にならないよう、両親や友達に嘘をついた。

小学生の時とは違って、中学生になってからは、状況を理解する努力が必要だった。友達との関係は、より一層複雑になった。欲しいものを得るためには、お金が必要だということが分かった。

ナイキの靴が欲しくて両親にゴネた。両親は私が普段履いていたアシックスの靴より、ナイキの靴の方が3倍ほど高かったので負担を感じていた。それにもかかわらず、私は数日間、執拗に要求し、結局ナイキの靴を履くことができた。ナイキの靴を履き始め、一週間くらい経ったある日、登校後、廊下の靴入れに入れて置いた靴が、無くなっていた。誰かが隠していたり、盗んだだろうと判断した。一時間くらい、学校の周辺を探してみたが、見つからなかった。私は担任の先生にこのことを知らせた。先生は誰か疑わしい人がいるのかという質問に、私は当時、仲が良くなかった同級生の名前を教えた。先生は、その同級生の家に電話をかけたが、その子は、自分は知らないと答えた。

両親は上履きで家に帰ってきた私に靴について尋ねた。私はありのまま話した。父は、もう一回一緒に探してみようといい、自転車の後ろに自分を乗せて、学校の周りを見て回った。靴は見つからなかった。

私はもう一度、両親に同じ靴を買ってほしいと無理を言った。両親は困っていた。数日後、父はナイキの靴を買ってきてくれた。しかし、私が欲しがっていたモデルとは違う靴だった。がっかりしたが、学校に行ったら友達に新しい靴のことを褒めてくれて、嬉しかった。

数か月後、私は無くしていた自分の靴を履いている他のクラスの同級生を見た。しかし私より力が強い子だったので返してほしいとは言えなかった。私は放課後、彼より早くその靴をとって家に帰った。

その後、彼は何もなかったように新しいナイキの靴を履いて学校に来た。私はクラスの掃除の時間を利用して、彼の新しい靴をトイレの便器に捨てた。その後、自分の靴が無くなったことに気づいた彼は、靴を探し始め、便器の中から靴を取り出した。彼が怒り出したり、犯人を探そうとしたりするような様子ではなかった。

ある日は、当時私と最も親しかった友達が、他の友達と口喧嘩をしていた。私の友達は、彼から約束していたものが受け取れなくて怒っていた。私の友達は、いきなり彼のことを一方的に殴り出した。隣で見ていた私もそれに力を貸した。私はそれが友情だと思ったし、カッコいい行動だと思っていた。

両親は朝7時に店のドアを開け、夜10時にドアを閉めた。

塾に通わなければならなかった。行きたくなかったが、母の強要で行くしかなかった。母は私の学校の成績が上がることを願っていた。当時、私はクラスの35人の中で18-25等の間の成績をもらっていた。学校と塾以外の時間は家でパソコンゲームにほとんどの時間を費やした。

高校に入学をした。まだ制服を着ていて、成績表を受けた。男子高校で規律が厳しいことで有名な学校だった。先生たちは片手に棒を握っていた。高校は朝8時に出席を取り、夜10時まで、学校で勉強をしなければならなかった。睡眠以外の時間はほとんど学校で過ごしていた。一日中学校で時間を過ごさなければいけないという事実、最初は慣れていなかったが、みんなが同じ条件で同じ時間を過ごすことで大きな不満はなかった。良い大学に入学したかった。しかし良い大学に必ず入学しなければならない明確な理由があるわけではなかった。

私なりに良い成績を出すために努力をしてみたが、望んで通りに成績が上がることはなかった。この頃、私は、私の周りの友達より勉強に素質がないということがわかった。

高校生の時は、友達みんなと問題なく円満に過ごした。一度だけ小さな争いがあったくらいだった。50分間の授業や勉強は退屈だったが、10分間の休みの時間は友達と話したり、遊んだりして、すごく楽しかった。

ある日は、休み時間に同じクラスの友達が、Marilyn MansonのThe Beautiful Peopleという曲を皆に勧めていた。みんなにはあまり受け入れられない雰囲気の中で、私だけは この曲を気に入って、彼はすごく喜んだ。数日後、彼は自分が好きな曲を集め入れたCDを私にプレゼントしてくれた。私は嬉しかった。CDには Oasis、Radiohead、Marilyn Manson、Metallicaのようなロックのジャンルの曲が多かった。私はRadioheadのファンになった。

初めてのセックスをした。

17代目の大統領選挙があった。父と母が応援していない与党の候補者が大統領になった。私が暮らしていた光州というところは、1980年代に起きた民主化運動が軍部政権によって強い弾圧を受け、それによる反発で与党の権力に対する市民たちの抵抗精神が強いところであった。なので地域投票率も野党の方が圧倒的に高かったし、大統領の選挙もそうだった。

大統領の選挙の結果が出た次の日、授業を始める前に各先生たちは、選挙結果に対しての不満と新しい大統領への批判を述べた。

その日も宿題をしてこなかったり、自分の指示に従わないと、学生は体罰を受けなければならなかった。体罰の方式は、各先生によって違った。

違法ダウンロードをして見た映画No Country for Old Menを見てショックを受けた。

修学能力試験の日に、私は緊張していなかった。中学校の時から上がりも下がりもしない成績について私はよく理解していた。試験の成績は、いつものように出てきた。私は光州にある私立大学の中で成績に合った学科を選ぶことにした。新聞放送学科と国語国文学科が私の成績に適切な学科だった。テレビで取材のために苦勞している記者たちが素敵だと思って新聞放送学科を選ぶことにした。

入学金と授業料で70万円を払うことになった。コミュニケーション概論、ジャーナリズム概論等、見知らぬ単語と授業環境に、私はうまく適応できなかった。友達と集まっておいしいもの食べたり、遊んだりするのは楽しかったが、授業に出るのは嫌だった。前期が終わって、私は学士警告を受けた。後期からは、学費も払わず、学校にも行かなかった。自動的に退学になった。

初めてアルバイトをした。大型スーパーで味付けされた肉を販売する仕事だった。8時出勤と11時出勤の2つの勤務に分けられ、一日に10時間ずつ、40分休憩の勤務だった。週に一日休むことができた。客引きをするのは苦ではなかったが、立ち続けるのは辛かった。

店には私を含めて4人で仕事を回した。当時24歳、25歳の先輩が二人いて、50代くらいのおばさんが一人いた。二人の先輩たちは、女性と車の話をするのが好きだった。おばさんは、実はアルバイトをしなくてもいいが、家にいると退屈だから仕事をするんだとよく話した。給料日に二人の先輩は、私と一緒に風俗街に行こうと誘っていた。

たまに店を管理する人が来ていた。そのたびにその人はパンをいっぱい持ってきた。パンには割引シールが貼ってあった。私はそのパンが好きではなかった。

仕事は三ヶ月くらいでやめた。

21歳、5月に軍隊に入隊した。入営の前日、夕方の高速バスに乗って初めて一人で光州からでることになった。バスから降りて近い店で夕食を食べ、近いサウナで寝た。すべてが見慣れなかった。早朝サウナから出て、美容室で髪を短く切った。タクシーに乗って訓練所に向かった。タクシー運転手にぼったくられるのではないかと心配した。

訓練所の入口には、皆が家族や友達、恋人と集まって、別れを準備していた。私は一人であったため、寂しくなって、友達に電話をかけた。両親にも電話をかけた。当時好きだった女の子にも電話をかけた。

「訓練兵立場」というマイク放送が流れて、待機していた訓練兵は蟻の巣に吸い込まれていく蟻のように列を作って訓練所の中に入り始めた。一帯がさらに騒がしくなり、時々、泣いている様子の人を見ることもあった。入所する途中に、高校の時仲がよかった友達に、短い間ではあったが、会えて嬉しかった。両親はその時、一緒に行けなくてごめんねと言った。

訓練所では3日間で身体検査、物品配給が行われた。身体検査は訓練兵みんなが上半身を脱衣し、一列で並んで検査を受けた。変な気分だった。

3日間のスケジュールが終わって、すべての訓練兵は各自配属された新兵教育部隊に行くことになった。そこでは5週間のトレーニングのスケジュールが予定されていた。

私はバスを乗って新兵教育部隊に運ばれた。目的地に到着すると、バスの外から待っていた教官たちが早く降りろと叫び出していた。訓練所とは雰囲気がまるで違うということが一気にわかることができた。ここでは名前ではなく、89番の訓練兵と呼ばれた。

新兵教育部隊では軍人として歩く方法、話す方法、挨拶する方法、食べる方法、機関銃を撃つ方法、手榴弾を投げる方法、軍歌を歌う方法などを学び、身につけなければならなかった。ここでの訓練生活が一週間くらいが経った頃、家族からの手紙が届いた。その日、私は皆が眠ってる間にポケットに手紙を入れ、こっそりトイレへ持って行った。便器に座って手紙を読んだ。読むほど呼吸が荒れてきて、涙も漏れ出た。泣くことを誰かにバレたくなくて、感情を抑えようとした。手紙には、健康に過ごして欲しいという言葉と愛しているという言葉が書かれていた。

毎週の日曜日になると、全訓練兵は必ず宗教行事に参加することになっていた。

仏教とプロテスタント、カトリック教の中で、私は毎週カトリック教に参加した。営内にある仏教のお寺とプロテスタント教の教会の建物は小さかったが、カトリック教の教会は全訓練

兵が入っても余るくらい大きい建物だった。宗教行事は1時間行なっていた。前半30分は配られた楽譜を見て聖歌を歌った。若い男性たちが軍服を着て、集まって聖歌を歌っている様子がバカみたいだと思ったが、いつの間にかに頑張って聖歌を歌っている自分のことに気づくことができた。

聖歌を歌って大分盛り上がったら、次は神父の説教を聞くことになっていた。説教の途中には何回もみんなでアーメンと言った。私は宗教を持ってはいなかったが、アーメンを言うたびクリスチャンになるようで妙に面白かった。神父は我々は皆、罪人だと言った。だから謝ろうと言った。神様は、皆さんの心の中にいるという話を聞いて、私は私の中の神様に私の過去の過ちを許してもらえるようお願いした。どういう過ちを犯したかはよくわからなかった。

キリスト教の行事が終わるといつもコーラとチョコパイが貰えた。訓練兵は、軍から配給される物品の以外のものは食べることはできなかったので、唯一教会で配られた民間の製品が私にはすごく美味しかった。

5週間の新兵訓練期間が終わって、自隊配置を受ける時が来た。私を含めて、5週間の訓練の成績が良かった何人かは、教官の命令によって、教会で別に集まることになった。先行的に優秀人員をスカウトするために、同じ師団の搜索部隊というところから上官が来ていた。その人は、集まった皆の前に立って短く、自分の部隊と部隊員になった時の任務について説明し、その後、続いて個人面談を行った。

私の番となり、彼は私に自分が属している搜索部隊と呼ばれるところの大変さについて改めて強くアピールしてきた。私を怖れさせるようだった。私は彼の胸元に飾られているよくわからない各種のバッジがかっこいいと思った。搜索部隊員になりたいと言った。

私は搜索部隊に選抜され、駐屯地がある坡州へ行くことになった。また見知らぬ環境で、見知らぬ人たちばかりだったが、慣れるのにそんなに時間はかからなかった。入隊の前、軍隊も人が住んでいるところだという話を聞いたのを思い出していた。

坡州は北朝鮮と最も近い地域の中で一つであった。

駐屯地では、毎週土曜日に、精神教育を行っていた。各小隊が一つのところに集まると、紙の資料がみんなに渡され、それが終わると、中隊長からの'教育'が始まった。教育の前半は北朝鮮に対して、そして北朝鮮軍に対しての情報や、中隊長の意見を聞くことができた。前半が終わると、10分くらいの休憩があり、大体の人はその時間、タバコを吸いに行っていた。私は同期に誘われ、初めてタバコを吸うことになった。教育の後半は北朝鮮が、我々にとって主敵であり、我々は何のような心構えで主敵と向き合わなければいけないのかという内容がいつものことだった。

私はすぐでも、北朝鮮軍を機関銃で撃ち殺せるようだった。北朝鮮軍を殺して、褒賞をもらう想像をしてみた。

入隊の以前、私は北朝鮮についてどう思っていたのか。たまたまテレビジョンに映っているキムジョンイルの様子、続いてキムジョンウンの様子、与党と野党の対北論争。理念対立によって韓国と戦争に遭った国、貧乏な国、あるいは近いけど行けない外国、というくらいに北朝鮮のことを覚えていたようだ。

私の部隊は、六つの小隊があり、その中で三つの小隊は駐屯地で3ヶ月間訓練をし、他の三つの小隊はGPへ行って3ヶ月間任務を果たしていた。3ヶ月間ごとに小隊別に交代をしながら、訓練と任務を繰り返した。

GPの主な任務はDMZと北朝鮮のGPの監視だった。GPは要塞のような形の建築物で4つの監視哨があり、各監視哨には望遠鏡や望遠カメラが設置されていた。夜間には赤外線望遠鏡が配られ

た。90分ごとに監視哨を回りながら北のほうを監視し、私が勤務したGP と北朝鮮軍のGPの距離は750メートル弱だった。

進級をすればするほど個人の自由時間が増えた。私は時間があれば本を読む習慣ができた。本を読むのに夢中なり、勢いで1日に3,4冊を読んだりもした。私は入隊するまで本を最初から最後まで読んだことが一回もなかった。

ある日は、高台にある監視哨で勤務をしていた。私は斜めに立ち、片手を開いた窓枠の方にかけていた。日がちょうど稜線を乗り越えている夕方だった。北朝鮮のGPではいつものように米を炊く煙が燃え上がっていた。私のGPでは煙が燃え上がることはなく、ただご飯の匂いがしてきた。その日は少し変だった。

冬のDMZの風景は涙が出るほど美しかった。

除隊をした。

アルベール・カミュの異邦人を読んだ。除隊の後、私は飲食店でデリバリーとサービングのアルバイトをした。軍隊にいた時、写真学科に通っていた後輩がいたが、彼が監視哨でカメラを上手に触る様子を見て、関心を持ったことがあった。アルバイトで貯めた100万ウォンでカメラを買った。写真を撮るのが楽しかった。写真に関する本を買い、有名な写真作家のことを調べたりした。当時、私は荒木経惟とユルゲン・テラーが好きだった。

私は写真を撮る日になると、家から一番近いバス停へ行って、一番初めにバス停に着くバスに乗った。そしてなるべく見慣れてないところに降りて、写真を撮った。見てくれる人はいなかったが、撮った写真を見て自ら満足していた。そしてインターネットでフォトグラファー、写真家になる方法などを検索していた。

この頃、私は宗教的な目的で自分に接してきた女のことが好きになった。

父は新聞の地域広告で写真クラブの会員募集という広告を見て、私に教えてくれた。私は会員登録を申し込んだ。誰かと一緒に写真のことについて話したり、交流ができるようになるのだと思って嬉しかった。

写真クラブの初日、私を除いた会員はみんな40代から60代の年齢の人たちだった。退職後、趣味活動としてカメラを学びに来た人が多かった。

思っていたことと違う環境に失望した。毎週、月曜日の5時は、地域の大学の講義室を借りて、交流ではなく、授業を聞くことになった。みんなが教授と呼んでいる人は、黒板の前に立ち、カメラの電源のつけ方から教えてくれた。私も彼のことを教授と呼んだ。

60代半ばくらいに見える彼のことを私は定年した教授だと思った。私は印刷物をコピーしたり、彼の雑務を手伝った。

ある日は彼は、私を家まで車で送ってくれた。移動中、車の中で彼は私にこれから何がしたいのかと聞いてきた。私は写真でやっていきたいと話した。彼は私に才能があると言ってくれた。韓国に写真学科がある大学に入学するか、ドイツ、アメリカ、日本のいずれかの国へ留学することを勧めてくれた。私は韓国の入試試験を2回は受けたくなかったため、留学のことを調べ始めた。

その年、秋が終わる頃、母の姉妹のおかげで家族3人みんな、初めて海外旅行として日本へ行くことになった。母の姉妹は会社から旅行のチケットをもらったが、忙しくなり行けないから、代わりに楽しんで来てくれと話した。

九州で3日間過ごすことになった。阿蘇山が良かった。日本へ留学することに決めた。

親は留学することに最初は反対していた。教授と呼ばれた人は非正規の講師だった。

日本に来てからは語学学校に通っていた。北新宿の古いアパートで4人でルームシェアをした。すごく狭かった。初めて地震に遭ってびっくりしたりもした。

写真学科に入学するため、勉強を頑張った。授業が終わると、学校の門が閉まるまで残って、自習をした。授業後の休みの時間にも先生に質問を続けて困らせた。

予定より1年早く、写真学科に入学することができた。写真学科ではカメラの電源のつけ方から教えてくれた。

ある日、先生は授業中、ロダンの考える人の写真をプロジェクトの画面でみんなに見せてくれた。50名ほどの学生たちが聞く授業で、先生はこの彫刻の作品の名前を知っている人はいるかと聞いた。誰もそれに答えなかった。数秒間静かになり、先生は一人を指で刺して、改めて聞いた。その子は考える人だと答えた。

学校の授業は嫌だったが、授業後、図書館で座って写真集を見る時間はとても楽しかった。

生まれて初めてお金を払って美術館に行った。マグリットの個展を見た。

2年生になって、写真の公募展に自分の作品を出した。優秀賞をもらうことになった。恵比寿にある写真美術館の地下の展示場で展示をすることができた。グランプリの作品を選出するため、7名の審査委員と公募展の関係者、そして観客の前で自分の作品に対して、プレゼンテーションをすることになった。

私の出番になり、壇上の前に立った。A4の紙の2ページに、私は言いたいことを出来るだけ格好をつけて書いて、覚えてきた。

覚えてきた通りに話すつもりだったが、下手な日本語で、意思疎通に難しさを感じた。観客席の一番前に座っていた主催社の社長は居眠りをしていた。グランプリを取った人は、翻訳の人がい

たら良かったのに、と言ってくれた。審査委員の中で一人は私の作品があまりに個人的で観念的だから、もっと見せることを工夫した方がいいと言ってくれた。

イベントが終わり、みんなが集まってパーティーのようなことをした。飲み物や食べ物が用意されていて、3人、5人グループを組んで、片手では飲み物を持って、審査委員を中心に集まって話合っていた。私は群れに入ることはできず、端っこでもじもじしていた。私を選んでくれた審査委員は私のことを探し、私は彼の隣で話すことができた。彼は私の作品が新しいと褒めてくれた。そのあと、彼が何を話したのか、周りの人々が何を話したのか、私の記憶に全く残らなかった。

パーティーのようなことが終わり、公募展の優秀賞の人たちだけが別に集まり、駅の近くの居酒屋に行くことになった。普段の私なら行かないような高級居酒屋だった。集まったみんなは同じ美術館の2階で行われていた杉本博司の展示のことについて話し合った。

私はその時まで、杉本博司が誰なのかわからなかった。家に帰ってきたら財布の中には名刺がたくさん入っていた。

公募展で優秀賞を貰ったことでしばらく高慢だった。ホームページを作り、インターネットに自分の名前を検索したりした。ホームページは半年くらいでドメインの料金を払えず、辞めることになった。

3年生になって、同じゼミの友達とよく会うことになった。いつも学校の近くのカフェでお互いに最近興味を持っていることや、芸術の全般的な話をたくさんした。一緒に作品を作ろうと工夫したりした。日本で初めて意見が合う友達ができて嬉しかった。

同じ年、また他の写真の公募展で入選をすることになった。優秀賞はもらえなかったことを、審査委員のせいにした。

ニューヨークへ2週間、旅行に行った。日本以外の初めての外国で、いろんなことに驚いた。ニューヨーク現代美術館に行った。すごく人が多かった。ピカソ、ゴッホ、ウォーホル、ポロック、ロスコなど、本とインターネットでしか見られなかった、彼らの作品を肉眼で見ることができた。感動はしなかった。特別展でルイズ・ブルジョワの個展も行われていた。私はその時までルイズ・ブルジョワのことを知らなかった。

グッズコーナーでMOMAと書いてある手の大きさのシールを買った。

ニューヨークの有名な本屋さんへ行った。荒木、デュシャン、ナン・ゴールディンの本を買った。ウェイウェイも買ったかったが、高くて買えなかった。

3年生が終わる頃、周りの友達は就活を始めていた。私はしなかった。つまらない授業の時間になると、ノートを出して、自分が何者なのかについての落書きをたくさんしていた。授業が終わると、図書館で画集を見る日が多かった。

アレクサンドル・ソルジェニーツィンの焚火と蟻を読んだ。小枝のように広がっていた考えが、一箇所に集まるような気がした。

生まれて初めて、自分のお金で絵の具を買った。プリントした自分の写真の上に絵の具を塗った。リヒターの作品を見る前まで私は天才だと思った。

この頃、私は一生、作品を作る人になりたいと思った。お風呂に入るたび、細野晴臣のアルバムをかけ、アルバムが終わると、浴槽から出た。

品川にある美術館で、美術館コレクションを見た。ロバート・ラウシェンバーグと李禹煥の作品を見て、慌てた。

4年生になると、他の大学院で博士課程をしていた友達から、あなたはたくさん考えるから、その考えを、大学院で作品と一緒に整理してみてもいいといい、大学院の進学を勧めてくれた。

池袋にある、大型のアパレルショップでバイトをしていた。資本主義と階級構造を体験するにもっとも適した場所だった。

4年生の後期、私はゼミの先生に最近の作品を見せたくて、メールで研究室で会う約束をした。その日、研究室に入ったら、先生は何の用で来たのか聞いてきた。私は作品を見せたいと言った。先生はわかったと言った。

私は30枚くらいの写真を用意してきた。研究室のデスクに5枚目の写真を羅列しようとする、先生はもういいと言ってきた。私は羅列するのを止め、先生は話を続けた。

「こういう現代芸術作品と向き合う時には、4つのパターンがあると思う。一つ目、わかる。二つ目、わかろうとする。三つ目、わからない。四つめ、わかろうともしない。その中で自分は三つ目だ。だから自分にこういう作品を見せても、自分はなんとも言ってあげられない。代わりに続けてみて、くらいは言える」

その後、先生は私に、フランスの写真公募展に出品することを勧めてくれた。それに関して詳しい人がいるから、紹介してくれると言ってくれた。私はわかりましたといい、ありがとうございましたといいながら研究室から出た。待って見たが、紹介などはなかった。

この頃、私は決定論について、強い確信を持ち、言語が持つ矛盾に対してのことを認知し始めた。トーマス・ルフ、ジョン・バルデッサリ、ゲルハルト・リヒター、ジル・ドゥルーズ、ミシェル・フーコーにはまっていた。

六本木で開催したソフィ・カルの個展を見て衝撃を受けた。

品川にある美術館で見たリー・キットの個展を見て衝撃を受けた。

黒澤明の羅生門を見て衝撃を受けた。

空を意識的に見る日が多くなってきた。空が美しいと感じる日が増えた。

私の卒業作品が優秀作に選ばれて、新宿にあるギャラリーでグループ展をすることになった。私には縦、横2メートルくらいの平面空間が与えられた。展示の前に、展示のレイアウトを提出することになった。私は写真作品と、小さいオブジェと一緒に配置したレイアウトを作成して提出した。展示の担当先生は、オブジェの配置はダメだと言った。グループ展は個展とは違うと言った。私は学科長に抗議のための面談を申し込んだ。私の質問に返ってくる学科長の返事も特に変わらなかった。

学科長は個展ができるように、自分の友達が運営しているギャラリーを紹介してくれると言ってくれた。待っていたが、紹介などはなかった。

大学院は写真学科ではなく、油画科に入ることにした。試験の一環としてドローイングブックを提出することになっていた。ドローイングブックが何かわからなくて大学院に電話をして聞いてみた。電話に出た人は、自分で解釈して提出しなさいと言った。ノートを買って絵を描き始めた。F60の木のパネルを買った、アクリルの絵の具を買って絵を描いた。楽しかった。

大学院に進学することになった。今の妻と同じ研究室で出会うことになった。

初めてアトリエができて嬉しかった。初めて油の絵の具を買って使ってみた。楽しかった。

毎朝、トマトを一個食べて、アトリエへ向かった。練馬から亀有へ引っ越し、2ヶ月後、取手へ引っ越した。ショスタコーヴィチの音楽を聴く日が多かった。

研究室の先生が白いビニール袋に油の絵の具をいっぱい入れて私にくれた。嬉しかった。携帯で写真を撮って、妻に自慢した。写真のことは忘れたようだった。寝る時間、食べる時間、以外は絵の具を持っていた。

絵と会話をするような経験(錯覚、誤解)をした。

ある日は、駒込で展示を見て、その周りを散歩していたら、狭い路地でお父さんと子供がキャッチボールをしているところを見た。

モスクワでは旅客機の火事によって41名が死亡する事故が起きた。

絵を描きながら、自分をことを思い、家族のことを思い、人類のことを思う(錯覚、誤解)経験をした。

カニエ・ウェストのYEをたくさん聴いた。

妻と一緒にデイヴィッド・リンチの個展を見に言った。面白かった。六本木にあるギャラリーで小林正人の展示を見た。その日は展示のオープニングの日で、作家を含めてギャラリーにはたく

さんの人が集まっていた。ギャラリーの奥のところには柿の葉寿司が用意されていた。僕は二つを取り、サーモンの方は私が食べて、鯖の方は妻に渡してあげた。ギャラリーの事務室のようなところにも絵が飾ってあった。ギャラリーのスタッフはこれらのことを丁寧に紹介してくれた。面白い展示だった。作家は色んな人と話すのにとっても忙しそうだった。私は後日、妻と一緒にこの展示をもう一回みた。

デイヴィッド・ホックニーとフランシス・ベーコンの中古の画集を買った。

講評会があった。絵を描いてみてどうだという先生の質問にゴミを作っているみたいだと答えた。先生は自分もそうだと書いた。

家の近くにあるハンバーガーの店でアルバイトを始めた。暇な時、私は店長にいい絵とは何かと聞いた。店長は自分が好きな絵がいい絵だと答えた。禁煙を試みたが、長くは続かず、失敗した。

夏には家で小さい絵をたくさん描いた。夕方になると妻と一緒に利根川の方に散歩に行った。頭を上げて、空をみていると大きい地球の中での自分のことを感じる事ができた。

学校で研究室のグループ展をすることになった。学生がしそうな展示だったと思った。訪問帳に自分の作品について褒め言葉があって嬉しかった。

何人かの友達や知り合いをアトリエに招待した。みんな作品を見て楽しんでくれて嬉しかった。その中で友達からの紹介で知り合いになったキュレーターに私は展示の場所を探してると言った。彼は自分が運営してるところで個展してみないかと誘ってくれた。私はわかったと言った。嬉しかった。

11月に滞在制作を始めることにした。その後、これは彼の予定変更で12月に延長になった。

豪雨があった。各種メディアが大雨に備えるように警告していた。妻は怖がっていた。二日に渡って大雨が降ってきた。雨が止んだ後に、水位が高くなっているはずの利根川を見に言った。思ったより高くまで水が上がってきて、早い速度で川が流れていた。川の色は焦げ茶色と紺色だった。私と妻は用意してきたレジャーシートを敷いてしばらく流れる川を眺めていた。右からには日が落ちていて、左からには月が昇っていた。今まで見た月の中で一番大きい月だった。

香港では民主化運動が続いていた。

市ヶ谷にあるギャラリーでO JUNの個展を見に行った。その日はオープニングの日で駅の近くの古いカフェでコーヒーを飲んでギャラリーへ向かった。ギャラリーには歩けないくらいたくさんの方が集まっていた。学生のような人は学生のような人同士に、作家のような人は作家のような人同士に、コレクターのような人はコレクターのような人同士に揃っていた。私と妻は学生のような集まりに入っていた。作家は忙しそうだった。私はDMに使われていた絵が好きだった。

その後、妻と一緒にトークショーに参加するため、もう一回ギャラリーに行った。招かれたゲストが作品の値段について話したら、作家はそうですかと言って、よくわからないような素振りをして、その場を濁した。

清澄白河にある美術館で古橋悌二のLOVERSを見た。魔法のようだと思った。ここには芸術がないと思った。

個展の滞在制作のため、妻と一緒に根津まで荷物を運んだ。ここから3週間制作し、3週間展示をする予定だった。建物の2階で制作をして、3階で眠った。初めての個展で胸がときめいた。自らに対しての期待が高かった。

次の日、キュレーターは彼の友達を紹介したいと言い、根津のカフェで会うことになった。その中には作家もいた。簡単な自己紹介の後、お互いに携帯を使って自分の作品の写真を見せ合った。彼らは私の作品を見て買いたいと言い、いくらなのか聞いてきた。天才だと言った。圧倒的だと言った。私は値段のことはまだ何も決めてなかったため、彼らは自分たちの作品の値段を例としてあげながら、希望する値段を言った。私はわかりましたと言い、その値段で売ることにした。私はお金がなかったため嬉しかった。

しかし、その後、彼らからの購入についての連絡は来なかった。こういうことは何度かあった。

滞在の場所に慣れる暇もなく、絵の具のチューブを絞った。展示場の奥にはキッチンがあって、そこには誰かが使い切れなかった木材が残ってあった。急いで木材を使って、木枠を作った。キャンバスを張った。興奮した。タバコが増えた。

滞在制作を始め、一週間、迷路に落ちた気分だった。

ある朝、キュレーターはこの前と同じカフェに私を呼び出した。サンドイッチを食べながら、制作はうまくやっているかを聞いてきた。私はそうではないと言った。サンドイッチを食べ、コーヒーを飲んで、一緒にギャラリーに戻った。

彼は最初、ギャラリーの中の制作風景を見て、乗ってないねと言った。私はそうですよと言った。しばらくしてから彼は帰った。

残ってあった木材を使い切ったため、木枠が作れなかった。木材を拾いに学校へ行ったギャラリーは学校と近いところがあったため、滞在している間には学校のゴミ捨て場によく木材を拾いに行っていた。

ギャラリーは寒かった。小さいヒーターがあったが、寒さを耐えるには足りなかった。展示のことを心配し始めた。

ギャラリーから準備してくれたDMが届いた。

夕方、妻がアルバイトに行っている間、外食をしようと、ギャラリーの近くの中華屋へ行った。年末だったので忘年会など、団体のお客で店がいっぱいだった。すごく騒がしゅうかった。一人で座れそうな席はなさそうだった。店の人は私に何人ですかと聞いてきた。私はまたきますと言って、店を出た。

夜になるとノクターンを聴きながら作業をした。ギャラリーには照明がなかったため夜になると暗かった。

絵を描くことに没頭した。ただ絵が増えていた。床にも油絵の具がたくさん付いていた。

お正月を迎えるため、妻と私は12月31日午前、荷物をまとめて、神楽坂で妻のお母さんと妹に会った。妹は神楽坂のフランス料理屋で働いていて、そこで作られたおせちを買った。妻の実家でみんなで一緒に夜ごはんを食べた。とても美味しかった。妻のお父さんは次の日の朝に帰ってくる予定だった。妻の実家にはどこでも物がたくさん置かれてあった。妻のお母さんはどうしてこうなったのかと独り言をしていた。私はこの家が好きだった。

みんな先に眠り、妻と私はキッチンで座って、年越しを待ちながらお茶を飲んだ。

朝8時、2階で寝ている私を妻が起こしに来た。妻は1階に妻のお父さんが来ていると言った。私は妻のお父さんには初めて会うため、少し緊張していた。静かに階段から降りて、1階のドアを開けた。座っていた妻のお父さんは立って、優しく私に握手しながら私のことを迎えてくれた。この時はまだ私は妻と結婚していなかった。

妻の実家の隣の家には妻の父方のお祖母さんが暮らしていて、みんなお祖母さんの家に行って、みんなの昔話を聞きながらゆっくり時間を過ごした。妻の親戚の方々は私のために韓国の食べ物を買って来てくれた。

次の日、私は妻の家族のみんなと妻の母方のお祖母さんがいるところに行った。車の中でみんなはお祖母さんの話をしていた。私は以前、妻と一緒にお祖母さんを会いに行ったことがあった。お祖母さんは高齢のため、養護施設で暮らしていた。妻はお祖母さんのことをおばあーと呼んでいた。お祖母さんはベッドで横になったまま私と妻を喜んで迎えてくれた。

5年前亡くなった私の祖母を思い出した。ちょうど日本の大学に入学した時、父から電話が来た。祖母が亡くなったと言った。その日私は家において、午後3時ごろ、ベランダの外を見ながら通話をしていた。もうすぐアルバイトに行かなければならなかった。家族の中で誰かが死ぬのは初めてのことだった。父は明日から葬式を行うと言った。私は明日の飛行機の便で帰ると言った。この時、私の声には確信がなかった。入学後の学校のスケジュールや飛行機のチケット代など、色々なことが同時に思い浮かんでしまっていた。父が大丈夫と言った。日本に残って、やることをちゃんとやってと言った。涙があふれ出るほど悲しまない自分のことを疑った。

祖母は寒い冬の朝、教会に向かっている途中、凍りついた路面で滑り、頭に怪我をした。この後、一年くらいを意識を失ったまま、寝たきりで亡くなった。

祖母は一年に3,4回会うことができていた。お正月などになると、家族みんなが祖父と祖母が住んでいる田舎に集まっていた。夜になって、寝る時間が近づいてくると、祖母は寝室に入る前、寝室のドアの前でここが暖かいからここに入って自分の隣で寝てねと言っていた。その度、私ははいと言って、他の部屋で寝た。祖母のいびきが嫌だった。

葬式が終わった後からずっと、私は祖母の最後が見られなかったことをすごく後悔することになった。父も私に日本に残ってと言ったことを後悔していると言った。

妻の家族と私は実家に戻って来た。荷物をまとめて、再びギャラリーへ向かった。妻のお父さんが送ってくれるといい、家族みんながギャラリーまで一緒に来てくれた。私は小さい手紙を急いで書いて、家族に渡した。

ギャラリーに戻って来た。夜、私は制作道具を片付けて、床を履いた。多くの人に来て、絵を見て喜んでくれて、販売にも繋がったらしいねと妻と話した。

展示の初日の朝、私は早く起きて床をもう一度履いた。妻と一緒に朝ごはんを食べて、気を揉みながら、客を待った。

人が来なかった。午前10時から午後6時まで一番たくさんの方が来る日は5人で、一人も来ない日が多かった。私は少し驚いた。

妻と展示の期間中に短く韓国に帰ることになった。その間、ギャラリーの留守番は友達にお願いした。韓国の家族たちはみんな妻のことを可愛がってくれた。妻は何でも美味しそうにたくさん食べた。初の個展はどうかという父の質問に人が結構来ると言った。

ギャラリーには大きい窓があって、2階から外の行き来する人や車を見ることができた。朝から晩まで人が通り過ぎ、車が通り過ぎ、雲が通り過ぎた。

展示が終わった。想像していたことは起こらなかった。妻と一緒に近くの動物園に行って動物を見た。カバを見て不思議だと思った。白南準は私と同年で個展を開いた。ヨーゼフ・ボイスは彼の展示を歴史的な瞬間だと評した。

ニーチェのツァラトゥストラはこう語ったを読んで、途中でやめた。しばらくぼーっとしていた。

家に帰ってからは紙に絵をよく描いた。大きいロールの紙を買って、千切って、そこに絵を描いていた。根津での展示期間中、私は学校でサイ・トゥオンブリーの画集を借りてよく見ていた。インターネットで作品を見る習慣ができた。ク・ジョンア、キキ・スミス、スーザン・ローゼンバーグ、ミリアム・カーンにはまっていた。ゲルハルトトリヒターがメトロポリタン美術館で大規模の個展をした。その図録を買った。間違えて買って2冊も買ってしまった。返品をしようとしたが、友人のことを思い出して、プレゼントした。彼はすごく喜んでくれた。

学校の修了展を見た。滝本英里と磯崎隼士の展示がよかった。ジョン・バルデッサリが死んだ。

上野にある美術館でハマスホイを見ることになった。入り口にある絵を見てすごく感動した。出口にあるハマスホイの絵のバッジのガチャポンをした。欲しがっていたバッジが出てなくて、がっかりしたら、近くにいたスタッフが何が欲しいですかと聞いてくれた。私は入り口にあった画家と妻の肖像のバッジが欲しいと言った。ちょうどそのスタッフはそのバッジを持っていて、私と交換してくれた。とても嬉しかった。

研究室の先輩の誘いで個展をすることができた。場所は御徒町だった。

新型コロナが広まった。

一週間の予定だった展示期間は短縮して、四日で終わることになった。その中で二日は一人も来なかった。DMを300枚注文して290枚が残った。展示には全部で8人が来てくれた。

髪の毛を剃って、タバコをやめた。

新型コロナで学校のアトリエが使えなくなった。家で絵を描いた。デイヴィッド・リンチとヴォルフガング・ティルマンズとフランシス・ベーコンの画集を買った。

家では小さいサイズの油絵をたくさん描いた。インターネットでポール・マッカートニーの個展の画像を見ることができた。面白かった。韓国で買って来た金煥基のエッセイを読んだ。彼は絵が売れなかったが、自分の絵が好きだった。

家の中が絵で狭くなって来ていた。絵のことを考えていると、たまに気づいたりした。一日に大体F12サイズの油絵を2枚ずつ描いた。キャンバスがない日は紙を千切って木炭とオイルパステルでドローイングを描いた。

家で植物を育て始めた。えごまとミニトマトとバジル。毎日大きくなる様子を見ていると嬉しかった。

妻が私の誕生日にケーキを作ってくれた。夕方には唐揚げを作ってくれた。とても美味しかった。

川沿いを散歩していて、流れている川を眺めた。佐倉にある美術館でモーリス・ルイスの作品を見た。慌てた。

春になって、動物が車に轢かれて、死んでいるのをよく見かけた。自転車に乗って散歩していると、たぬきが車に轢かれ、車道で死んでいるのを見た。自転車を止めて、死体を歩道の近くに寄せた。埋めるべきかと思ったが、そうはしなかった。

雨の日の後、午後、家の近くでスズメが車に轢かれて死んでいるのを見た。ペしゃんこになった状態で死んでいた。歩道に寄せなかった。携帯で写真を撮った。

雨の日の後、午前、家の近くでトカゲが何かに潰されて死んでいるのを見た。ペしゃんこになった状態で死んでいた。携帯で写真を撮った。

ロダンが自然を見ることを強調した。

私自身も自然の一部であることを認識していた。

ビデオ通話で先生と話すことになった。先生はいつも調子はどうだと聞いてくる。私はよくわからないです、か普通ですと答える。いつもそうだ。先生は私の絵を見て、新鮮だと言った。ニュー・ペインティング式だと言った。

私は毎朝、8時と9時の間に起きる。妻は簡単な朝ごはんを作ってくれる。妻が朝ごはんを作っている間、私は椅子に座って、窓の外を見る。窓の外には5メートルくらい大きさの松の木があって、その100メートルくらい後ろには、その3倍くらい大きさの、名前がわからない2周類の木が見える。そして空が見える。窓の外を見ていると、すぐ考え込むことが多い。

妻が朝ごはんを持って来てくれると、考え込んでいたのが止んで、すぐ忘れてしまう。朝ごはんを食べる。

家からは200メートルくらい離れたところに幼稚園がある。朝ごはんを食べていると、外から幼稚園へ向かっている子供の声と、その母の声が聞こえてくる。私の家は2階のアパートだから、窓越しによく彼らを見たりする。

1時間くらい後になると、シルバーの色のワゴン車一台がアパートの前にとまる。一階に住んでいるおばあさんは時間になると杖を持って家から出て、ワゴン車を待っている。ワゴン車からは中年くらいの女性がおばあさんと挨拶し、ワゴン車に乗ることを手伝う。そしてワゴン車はおばあさんを乗せて去る。

暑くなる頃、学校のアトリエが使えるようになってきた。半年ぶりに使うアトリエで嬉しかった。体をもっと自由に動かすことができた。

アトリエの床で横になって、天井を見ていると、ピカソとマティスとデュシャンが死んでいることを思い出した。その次、草間彌生、李禹煥も死ぬと。

梅雨が長かった。路上ではみみずをよく見かけた。死んでいるみみずもよく見かけた。

学校のアトリエに行くためにはいつもバスに乗った。バス停までは自転車に乗ったが、その自転車はバス停の近くにあるホームセンターに止めていた。私はバスの時刻表を見て、次のバスまで時間に余裕があると、ホームセンターに中のペットショップにいる犬や猫を見たりした。ケージの中の犬や猫は周期的に変わるようだった。

荒井由実のアルバムをよく聞いた。

家の中でたまに小さいとかげが見られた。

ゴーギャンの絵をよく見た。

11月、先生の推薦でグループ展に参加することになった。搬入の日、展示の関係者は私の作品を見て、人がテーマですかと聞いてきた。私はあ...とえ...しか言えず、まともな答えができなかった。

妻はたまに人間なんてららららという歌を歌う。

菅義偉が新しい総理になった。

ナゴルノ・カラバフ戦争が終わった。

まだ絵のことは語らず

アメリカ大統領選挙にジョー・バイデンが当選した。

2) Tシャツについて

ネットでいい条件のアルバイトがあったので、応募するためハローワークへ向かった。ハローワークに行くのは気に食わなかったが、いざ、家から出てみると気持ちは晴れた。

雨が降りそうな天気だったが、天気予報での降水確率は低かったから、傘などは持って行かなかった。

近所のハローワークまでは徒歩15分くらい、そこまでちょうど半分を過ぎたところで突然土砂降りの雨が降ってきた。一瞬で空色の半袖Tシャツが濡れた。僕は雨にうたれるのが好きなので気持ちよかった。

夕立だったのか、雨は長くは降らなかった。ハローワークに着いたころは止みかけていた。

僕は濡れたまま入口にある受付で用件を言い、窓口の前の椅子に座って自分が呼ばれるのを待っていた。受付で濡れている自分を見てかわいそうに思い、何か一言、言ってくれるかと軽い期待をしたが、特に何もなかった。

エメラルド色の椅子、各種のポスター、少し低く感じる天井、ベージュ色の電話器、傘ストッパーなど…

椅子に座って順番を待っていると、背が高い老人が前を通った。

白い半袖Tシャツを着て、チャコールのトレーニングパンツを履いていた。素材が厚い靴下を履いて、底が薄いサンダルを履いていた。そのTシャツは全体的に伸びていて、所々にちょっとづつ血がついていた。パンツには毛玉が沢山あった。杖を持っていた。

僕はその老人が椅子に座る前に、窓口の人たちが老人に注目していることに気づいた。

一人の40代に見える女性役員が窓口から出て、老人の前に立った。そして腰を下げて老人に聞いた。老人は僕から一席あけて、隣に座っていた。

何か御用ですか？

この場所がわからなくてさ…

老人は片手で持っている折り畳まれた紙を役員に見せた。

紙はA4サイズで白黒のグーグルマップのパソコン画面が印刷されていた。紙の真ん中には蛍光ペンで丸がつけられていた。

役員はまた聞いた。

受付で整理券はもらいました？

いや、もらってない。

そうですか、ちょっと待ってくださいね。

役員は自分のデスクの方に行って紙とペンを持ってきた。

ここに、お名前とご住所とお電話番号を書いてください。

老人は書くのに紙とペンを支えるところがなくて少し嫌がっていた。

役員はそれに気づき、再びデスクに戻り平たいプラスチックのようなものを持ってきて老人に渡した。

老人が書いている途中、役員は老人が見せた紙を見ながら聞いた。

ここで仕事が決まったけど場所がわからないのですか？

老人は返事をしなかった。

今日はお仕事を探しにきたのですか？

老人は“今書いているじゃないか”と少しむかついた声で答えた。

名前、住所、電話番号を書き終わった老人は紙を役員に渡した。

順番でお名前をお呼びしますからちょっと待っててくださいね。

と役員が答えると隣からその役員の上司に見える女性が現れた。

女性は役員から老人が書いた紙をもらい、役員に「私がやるね」と小さい声で言った。

こちらへどうぞー

紙と一緒に自分の窓口に戻った女性が、再び紙を見て老人の名前を呼んだ。

杖で身体を支えながら、椅子から立ち上がった老人は窓口へ向かった。5メートル、不安定な歩き方が、もう一度周りの注目を引いた。

椅子に座った老人に、女性は聞いた

この地図の丸のところに行きたいのですか？

そう

ここはこれからお仕事される場所ですか？

いや、俺仕事をやってたけどさ、足が腫れてきて、仕事できなくなったから、ここ行くとお金返ってくるというから、

あ、そうなんですね。

女性は話しながらも、老人の服の血が気になったのか、ウェットティッシュを用意していた。

その服に着いてるのは血なのかな？大丈夫？

これは痒いから掻いたら血が出て、

あ、そうなんだね。とりあえず、あの、手を拭いてもらおうかな、ここはみんながいる場所だからね。血がついた手だとね、よくないからね。

女性はウェットティッシュを老人に渡して、老人は適当に自分の手を拭いた。拭いたウェットティッシュを捨てる場所を探すと、女性はデスクの下から黒いゴミ箱を取って、老人が捨てやすいように老人の前まで持ってきた。

老人がウェットティッシュをそのゴミ箱に入れると、女性が「ありがとう」と言った。

女性は席に戻り、老人に聞いた。

ハローワークは初めてですか？

いや、昔来たことある。

そうか、ここは以前ハローワークで紹介されたの？
誰かにハローワークに行くとか教えてくれるって言われた？

いや、だからハローワークとは関係ないんだよ。

あ、そっか、ただ行き方聞きたくてきたんだね。

もういいよ、帰る。

老人は椅子から立ち上がろうとした。

この場所は どうやって行くの？ 今日何できた？

車だよ。

車ね、車だとすごく近いよ。この大通りのセブンあるじゃん、その

俺もそのセブンの近くまで行ったんだけど、わからねんだよ。
もういいよ。

老人は足をかろうじて引きながら、急いで出ようとした。老人のパンツのポケットから通帳が落ちた。女性はすぐ拾い、老人に渡した。

大事なもの落としたよ。大丈夫？歩ける？

老人は答えずに外へ出た。

その後、濡れた服のせいか、体が冷えたことに気づいた時、老人が座っていた窓口の反対側から僕の名前が呼ばれた。

3) 12月26日

今朝、天気予報を見ていたら、雪が降る予報があった。30%。

夏に会った磯崎さんの言葉を思い出した。

横須賀に住んで雪が降るのを一回も見たことがない。

今日は雪が降るかもしれない、と僕は思った。

小さい頃、親戚の家に遊びに行ったことがあった。

地方の港町、狭い路地に小さい庭が付いてる家が並んでくっついてるところ。

その中で鉄の門が緑色のペンキで厚く塗られてあるところ。

親戚の家には兄弟が3人いた。自分より6歳上の従兄弟、4歳上の従姉妹、1歳上の従姉妹。

その日は雪がたくさん降っていた。

だから、みんなと一緒に小さい庭で雪合戦をした。

冷たい雪を集めて、目の前の誰かに投げた、また誰かが僕に雪を投げた。

息切れしてきて、手が凍えたが、止められなかった。いっぱい笑ったようだった。

いっぱい楽しんでたようだった。

雪といえばこの記憶を一番初めに思い出す。

今ここには雨よりは軽くて、雪よりは透明なものが舞い散っている。

4) 噛む犬

妻と海が見える公園で散歩していたら、
少し上がったところから三線の音と一緒に沖縄の民謡の音が聞こえてきた。
去年の沖縄旅行の時が思い出されて嬉しかった。
近くまで寄ってみた。

三線を弾きながら沖縄民謡を歌う女性の隣には木に結ばれている黒い犬がいた。
犬は近づいた私たちをみて、嬉しそうにもものすごい勢いで尻尾を振った。
私たちのところまで行きたいけどリードで行けないようで苦しそうな声を出した。
犬との距離が3メートルくらい。
女性の曲が終わった。

'散歩してたらいい曲が流れていて勝手に聞きにきました'

'6月に沖縄でコンクールがあるの'

'素敵ですね'

犬は相変わらず辛そうな声。

'この子触ってみてもいいですか?'

'いいですよ'

僕は犬の顎のところを搔くような感じでごしごしと触った。
犬は嬉しそうだった。短い数秒の間に犬は僕の手口に口を当てようとした。
少し異変を感じた僕は触ることをやめた。
少し犬から離れた。
そしたら犬は吠え始めた。

'どうしたの?'

何故か吠えてる犬に向かってまた触ろうとした。
頭を撫でてあげようとしたら左手の中指が噛まれた。驚いて手を引いた。
中指から伝わってくる痛みをなるべく無視して、冷静になろうと努力した。
女性は犬に叱った。

'上から触るのはダメなんですよ'

'あ、そうなんですよね'

中指の痛みはぶつけられる対象を探していた。
帰って絵を描いた。

5) ファミリーレストラン

7時くらいに目を開いたら、まだ雨風が荒かった。

風の音が家のところどころに割り込んできた。

姿勢を変えて再び寝入った。

妻が僕を起こしにきた。階段を上る音で彼女が来てることがわかったが、起きようとはしなかった。

7時半だよ、起きる時間だよ。

妻は僕の近くに来てまた言った。

7時半だよ、起きる時間だよ。

昨日の夜、妻とファミリーレストランで朝ごはんを食べる約束をしていた。

簡単に着替えをして、青いニット帽子を被った。門を開けて家の外へ出かけた。

風が荒かった。ダウンジャケットを着ていたが、風に肌が包まれることが感じられた。

傘が何回もひっくり返られた。

道の反対側からくる老人は傘をさすことを諦めたのか、両手で傘を強く握って雨風に立ち向かっていた。

店に入ると、二つのテーブルだけに老人の客がいて、他のテーブルは全部空いていた。

'お好きな席どうぞ'

窓際の席に座った。

適当な接客、適当な席、適当な音量で流れている音楽、適当な緊張感。

コーヒーを飲んだ、外は車がワイパーをつけて走っていた。人はいなかった。

店員は注文した食べ物を持ってきた。

'ごゆっくりどうぞ'

パンケーキにスクランブルエッグ、ポテトフライを食べた。

いつの間にか隣の席には背が高い老人男性が座っていた。

ニット帽子を被っていた。黒いナイキのスニーカー、灰色のアシックスの靴下。

老人はトイレと席をよく行ったり来たりした。

老人はライスの上にスクランブルエッグを乗せ、その上にケチャップをかけた。

僕と妻は前日みた映画のことについて話し合った。生きることについて話し合った。

明確には思い出せない。

隣の席の老人は時々首を縦に振った。

まるで妻の話にうなずくようだった。

会計をして、店から出た。近いところに海岸公園があったため、そこに向かった。

激しく揺れる海が見たかった。

カモメが滑るように飛んでいた。

6) 夏のおわり

夏が終わって

足の裏に冷氣上がってきて、自然に椅子の上に足をあげるようになった。

いつも3時くらいになると眠くなり、床でtillmansの本を枕にして昼寝をしていたが、もうそうはできない。

庭の雑草も元気をなくしてきた。日ごとに早い速度で濃くなり、広がるものたちが元の場所で止まっている。

飼っていた金魚がヒバカリの餌になって、死んでから3ヶ月が過ぎた。

名前があったようだけど、忘れてしまった。

7) 私に言ってみて

去年の3月に引っ越してきた家には小さい庭があって、最近、その庭に鳥の餌台作って、鳥を待っていた。餌はホームセンターで買ったひまわりの種。餌台はちょうど部屋の窓から見えるようにしたくて、足の長さの調整や、置く場所の位置を工夫した。

一週間くらい経ったのか、まだ鳥が来る気配はなく、待ち続けることしかできないということにがっかりしていた。

餌台が問題なのか、場所が問題なのか、

鳥の声は近くから聞こえて来るが、こっちへ近づいて来ることはなかった。

3泊4日で知床へ行ってきた。その宿には朝ご飯を食べる部屋の窓から鳥の餌台が見えて、たくさんの鳥が来ていた。羨ましいと思った。

宿の人に鳥を呼び寄せる方法を聞いてみたが、待っていたらきっと来るよと言ってくれるだけだった。

知床は思っていたより寒くなかった。

帰ってきた時、家の餌台のひまわりの種は減っておらず、みかんなど果物のようなのも置いた方がいいと親友が教えてくれたが、なぜか、気乗りしなかった。

次の日の朝、朝ご飯におしるこを食べていたら、一羽のシジュウカラが餌台にやってきた。

きたよ！僕は妻に人差し指で餌台を差し、妻と僕は喜んだ。

僕はまた唇に人差し指を当てて、妻を見ながら'シー'と言った。

それから、庭の餌台には二羽のシジュウカラが朝から昼ごろまで出入りするようになった。

雨が2回くらい降った。

庭に普段より大きなものが動く音がして、窓の方に行ってみた。

鳩の一羽が庭の土にくちばしでほじくっていた。僕は鳩のことを好きではなかったので、窓を勢いよく開けて、縁側の上で腕を大きく回した。鳩は少し僕から離れたが、相変わらず、何もなかったかのようにまた土をくちばしでほじくりつづけた。僕はスリッパを履き鳩の方へ走るような動きをとった。やっと鳩は飛び、5メートル離れた木の枝の上上がった。それ以上鳩を追い払うことはできなかった。それから、鳩は家の庭によく出入りするようになった。餌台には興味がないうので、上に登ったりはしなかったが、鳩が来ているとシジュウカラは来ないような気がして、鳩が現れる度に僕は外に出て、鳩を追い払った。

'人間のエゴってすごいですよね'と苦笑いをしながら、この話を昨日友人に話した。

友人は黙々ご飯を食べ続けていた。

プーチンがウクライナ東部への派兵を命令した。

8) 犬について

犬について 1

小学校の時、どういう成り行きだったのかは記憶にないが、白い子犬を飼うことになった。家の裏にある小さい庭には白い子犬がいた。子犬の家があったのか、リードを付けていたのかは記憶にない。時々母が飯をあげていた気はする。名前はチャングだった。当時放映されていたクレヨンしんちゃんの主人公、しんのすけの韓国の名前。僕はチャングを可愛がっていた。一緒に散歩をしたのか、ボール遊びをしたのかなどは記憶にない。家の裏、庭にはチャングがいた。

ある日、チャングの姿が見えなくなった。チャングを探しに出かけた記憶はない。母に聞いてみた。チャングはどこにいるの？母は最初は知らないと言っていた気がする。田舎にいる祖母の家に戻ったと言った。僕はどうして？と聞いた気がする。母は話を紛らしながら祖母と一緒に過ごしていると言った気がする。僕はまたどうして？と聞いた気がする。母は仕方なく祖母の体が悪くなって、チャングを食べたという話をやんわりと説明した。どういう言い方をしたのかは記憶にない。

僕はその日悲しかったのか記憶にない、悲しかったような気もするが、本当にそうだったのかはわからない。

犬について 2

中学生の時、家から遠くないところにある塾に通っていた。値段は月2万5千円だった気がする。国語、英語、数学を教えてくれた。数学は男の先生で、斜視だった。国語は若い女の先生で美人だった。英語の先生は中国から来たような発音をする若い女の先生だった。先生たちはみんな生徒のことが好きで、僕も先生たちが好きだった。

塾は一般的な3階建ての建物で、1階と2階は塾で、3階は塾長とその家族が暮らしているようだった。塾の生徒の数は多くなかったので、僕は大体みんなと仲良く過ごせたようだった。

塾ではあまり長くない期間、子犬がいた。小さい白い子犬。たいてい廊下や階段の下で虫を追いかけてたり、寝ていた。僕はその子犬が好きだった。休み時間になると子犬を探し、頭と腹を撫でていた。いつからかはわからないが、僕は塾で一番仲がよかった友達と一緒にこっそり子犬を虐めるようになった。拳であごを打ったり、性器を触ったりした。強くも弱くもなく、程良く虐めようとした気がする。子犬はたまに泣き声をしたが、すぐまた僕のところに懐いてきた。

どうして子犬を虐めたか、動機が思い浮かばない。

9) 映画を見た後

映画を見た。

すごくいい映画だった。

ゆきほは夕ご飯の支度を始めた。

今日買った大根を切り始めた。

僕はタバコを吸おうと縁側に出て、タバコに火をつけた。

適度に風が吹いていたが、火力が強いライターだったので火をつけることは難しくなかった。

空は暗い海の色だった。その下で雲が過ぎていた。

雲は暗い紫色。

庭の木の枝の背景が暗い紫色に変わってきた。

すごく大きい雲。

戦艦のようだなと思ったが、それよりは大きいと考え直した。

大きい島のようだなと思ったが、それより小さいと考え直した。

雲が過ぎ切る前にタバコを吸い終わった。

数日間寒い日が続いていたが、今日は寒くなかった。

雲が過ぎ切る前に部屋に戻ってきた。

10) 坂本龍一

坂本龍一の新しい曲、letaを聴いた。

何度も聴いた。坂本龍一の次に聴いたんじゃないかなと思うくらい聴いた。

電車の中でも、家の中でも。

今日また聞こうとイヤホンを手を取ったら、どんな曲だったのかを忘れていた。

他にも忘れてることがあるだろうなと思った。

11) 虫

(1)

作品の搬入のためレンタカーを借り、東京へ向かっていた。
初めての道に入り、体が硬くなるのを感じていた。お天気は晴れ。
赤信号だったのだろうか、ただの渋滞だったのだろうか。車は道中に止まり、自分は前の車が走り出すのを待っていた。

右前の車は白い軽バンで、自分が借りた車と同じ車種だった。
違うところは水回りクリーニング、会社名などが書いてある。
その車も自分の車も進まずしばらく止まっていた。

その車の左前の窓が降りているのが見えた。同時に助手席に座り、笑っている男の人の姿も見えた。
窓が半分程度降りてきたら、中から小さい何かが投げられた。そしてすぐ窓は上がった。
助手席の男の人はずっと笑っている。

路面に投げられたのは小さい虫だった。おそらくカメムシ。地面のアスファルトの色と近い色をしていた。
ひっくり返られて、足を激しく動かしている。

1. その時自分は車のガラス越しで虫を見ながら可哀想に思っていた
2. その時自分は車のガラス越しで虫を見ながら可哀想に思わされた
3. その時自分は車のガラス越しで虫を見ながら可哀想にってしまった

何かしらの善悪の形を感じた。

(2)

今朝ヨガをするためマットを引いた。引いたマットの近くに小さい黒い点のようなあり、それはゆっくり動いていた。
小さい虫だと思って、特に気にしてはなかった。大きさ1ミリくらい。
ヨガを始め、2分くらい経っただろうか、姿勢を変えようとしたらいつの間にかその虫はマットの上へ上がっていた。

1. このままヨガをし続けると虫が自分の体に押しつぶされて死ぬかもしれない
2. このままだと次の姿勢をとることなどに邪魔

だと思い、中指で虫を弾き、マットの外へ飛ばした。
殺すつもりではなかったが外へ飛ばされたあと虫は動かなかった。
はっと思い、その瞬時に(1)のことも思い出した。

12) 軽い落ち葉

午後1時が過ぎ、切れたタバコを買いに近所のコンビニに自転車を乗って向かった。
坂道を勢いで降り、行き止まりのところまで右へ曲がった時、左にある壁の下に何かがあったことに気が付いた。

一瞬でしか見られなかったため、その正体は何だったかはわからなかったが、無機質なものではないということだけは直感していた。

自転車を止めて、振り向いてみた。

亀が甲羅の中に引っ込めた頭をちょっとずつ出していた。きっと私の自転車で驚いたのだ。

亀がいる。

晴れた日だった。

周辺を見てみたが、誰もいなかった。

しばらく道のと真ん中で亀を眺めていた。自転車へ戻って、コンビニに向かった。

水槽から出てきたのか、海からやって来たのか。

買い物が終わり5分くらい経った、

戻ったら亀はいなくなっていた。

自転車から降りて、周辺を見てみたが、亀はいなかった。

亀がいなくなったところの反対側の家から人の気配がした。

60代の男が家の庭で腰を曲げ何かをしていた。

'僕、さっきこの道を通ったんですけど、亀いましたよね？'

私は男に言った。すると男は

'ん？あ．．あ．．'

としながら、人差し指で自分で耳を指し、そして手を振った。

歳をとって耳がよく聞こえない人だと思った。

'あの一僕、さっき、この道を通ったんですけど、亀いましたよね？'

少し大きい声で言った。

'あ！．．．あ．．あ．．'

また同じジェスチャー。

耳が完全に聞こえない人なんだ、と思った。

男は僕がいるところに近づいて来てた。

今度は口を大きく動かしながら、同じことを言った。

両手をたたみ、手のひらを肩のところまで持って行って、ぱたぱたしてみた。

すると向こうも同じ動きをしながら、さらに近づいてきた。

鳥だと思ってるかもしれない、と思った。

'ここに亀がいたんですよ'

亀がいたところを指しながら、指先を回した。

'ん．あ．．あ．．．'

男は私が指したところにまた腰を曲げ、首を伸ばしながら'それ'を見ようとした。

もういないよ、と思った。

急いで帰りたくなって、ざっと挨拶をした。

'ありがとうございました'

'あ！'

男は首を軽く下げた。

13) Man of war

うあっ！

びっくりしたー！

ヒョンソクー！カマキリがいるよ！

三日前は玄関にいて、今はキッチンの方までやってきたカマキリ。

今朝壁にくっついてたカマキリを見て、この数日間なんか食べてたのかなと思ったところだった。

カマキリは洗濯機の下にいた。妻は回し終わった洗濯物取り出そうとして、飛び上がるカマキリを見て驚いたのだ。

妻の驚きにカマキリも再び驚いたのか、もう一回飛び上がった。

洗濯機の裏にあるホース掴んで蛇口の上まで登って行った。

RadioheadのMan of Warが流れていた。

14) 席

仕事が終わりに、帰りの電車に乗った。時刻はまだ昼の12時20分、一回乗り換えがあって、家までは1時間かかる。乗り換えをする前の電車の座席は青くて、その後の電車の座席は赤い。

僕は出勤、退勤の電車の中ではいつも30分くらい英語の勉強をし、それが終わると音楽を聴きながら眠ったり、窓の外の風景や電車の中の人々を見ることが多い。

この間も同じく青い座席から赤い座席に変わって座った。車両のドアから近い席。英語の勉強が終わり眠くなり始めるころ、駅に停車した電車には新しい人々が乗ってきた。ちょうど満席になりかけ、最後に乗車した人たちには座れる席があまりなかった。

3人の家族に見える人たちが席を探していた。中年の娘に見える女性と老人の夫婦。ちょうど僕の隣に座っていた人が降りて、彼らは僕の前の方に向かってきた。僕の隣の席に妻の方が座ると同時に僕は座席から立ち上がった。

夫の方は手を振りながら譲ってくれなくて大丈夫なのに、というようなジェスチャーをした。ヘッドフォンをかけて音楽を流していたので彼の言葉は聞こえなかった。僕は彼に何の合図もせず、ただ立った後左のドアの方へ少し動き、そのままドアの外を眺めた。

僕はいくらしないうちにさっきの自分がした行動に疑問を持ち始めた。「ええ」とか「大丈夫ですよ」など簡単な言葉くらいは言えたはずだったのにと。普段の自分からは少し変わった様子で不思議に思った。

疑問を解決できず、音楽の選曲を変えた。暴力的な言葉がたくさん出るアルバムを選んだ。「殺す」、「奪う」などの言葉がビットに合わせて流れてきた。僕はその音のリズムに合わせてうなづくように首を動かしていた。

右下、気がついたら座っている彼は目を瞑って、首を横に傾けたまま一定のリズムで体を弾くように肩から首周りを動かしていた。その時、僕は彼の動きが自分が聴いてる音とリンクしたような錯覚を感じた。彼は音に合わせて動いてるのではなく、パーキンソン病などの何らかの症状によって痙攣していると判断するには数秒くらい掛かった。

音は相変わらず流れ続けていた、僕の首は動いていたし、彼の首も動いていた。家の最寄駅に着くまでの間、僕はテーブルの上に現れた虫を見る自分のように、電車の中で立っている自分自身を見ていた。

最寄駅につき、目を瞑っていた彼は僕が降りようとする様子が見えたのか、軽く右手を上げて「ありがとう」と言ってくれた。言葉は聞こえなかったが、唇の動きでわかった。僕は軽く頭を下げた後降りた。

15) sheets

これは2024年の年始に森田さんへ送ったメッセージです。

夏のある日、洗濯したシーツを家の2階に干したことがありました。
その日は少し風が強かったです

気がついたら干してあったシーツがなくなっていました。

僕たちの家は崖のようなどころにあるので、風に飛ばされて下の方に落ちたのかと思い、家の周辺を歩きながら探してみましたがシーツを見つけることはできませんでした。

もしかしてお隣さんの家の庭などに落ちてしまったのかと思い、尋ねてみたのですが、お隣さんの庭にもうちのシーツはないとのことでした。

夕方になるとうちのベルが鳴りました。ドアを開けるとお隣さんが立っていました。シーツが見つかったのかと思い、嬉しかったのですが、お隣さんは「お菓子をありがとうございます、これもらってください」と言いながらたくさんのお菓子が入った袋を渡そうとしました。しかし私たちはお隣さんにお菓子を渡したことはなく、妻がそう言う「あ、そうですか、僕の家ドアーにお菓子の袋が掛けてあったから小澤さんが下さったのかと思いましたが違いましたね、でも大丈夫ですもらってください」と言って、私たちはその袋をもらいました。

その後なぜか新しいシーツは買えず、街を散歩して、他の家で似たようなシーツが干してあると、あれは家のシーツなのだろうか、などと思ったりしました。僕たちはシーツのことをいつの間にかシーツ君と呼び始めていました。

そのシーツ君はどこまで行ってしまったのか、ずっと不思議に思っていました、

二週間前の朝、妻から起こされた僕は不思議なものを見ることができました。遠くへ行ってしまったと思っていたシーツ君が家の裏の崖から高く伸び上がった木の枝に掛かって風と共にゆらゆらしているのです。

僕たちはシーツ君が戻ってきたと喜びました。

まだシーツ君はその木から降りてきてはいませんが、ここは昨日の夜から今も風がとても強くて、少しいつものシーツ君の様子とは違います。もしかしたら今日僕たちのところに帰ってくるかもしれません。

ここまでが2024年の年始に森田さんへ送ったメッセージです。

現在2024年3月29日午前10時ごろ、外の天気は嵐で、シーツはまだ木にかかったままです。森田さんはその後私に自分の亀と夢についての話をしてくれました。

16) 髭と髭剃り

並び

搭乗案内の放送が始まり、人々は並びました。私は後から乗るのを好んでいるので、少し待ってから並ぶことにしました。

ピザ

前日の夕飯に食べ残したピザを次の日のお昼にフライパンで温めました。

風力発電所

風力発電所を建てると周辺の街に騒音被害が発生するニュースを見たことがありました。政府との被害補償問題について意見が合わなくて困っていると住民はインタビューに答えました。

犬の鳴き声

犬の鳴き声

鳥

網に掛かっている鳥の骨格を見ました。古そうに見えるけれど、どうしてここに掛かっているままなのか不思議に思いました。

猫

母はたくさんの猫が祖父の家によく来ると言いました。祖父は記憶力が乏しくてなっしまい、猫にご飯をあげすぎていると言いました。

席

以前はバスの後ろの席に座るのが好きだったけれど、今はできるだけ前の席に座ろうとしています。

パン

バスの運転士は運転の途中、丸い形のパンを食べました。私はそのパンはクリームパンだと思いました。

救命胴衣

救命胴衣は席の下にあると書いてありましたが、自分の目で見ることではできませんでした。

髪の毛

飛行機の窓枠の間に髪の毛がついていました。私の髪の毛ではないのに誰かが私の髪の毛だと思うのではないかと思い、それが少し心配になりました。

17) ブイーの話

ブイーという名前の男がいます。僕が彼を初めて見た時は彼は中国人だと思いました。僕がブイーに中国人ですかと聞いたら、彼はベトナム人だと教えてくれました。

ブイーは僕にいつも笑顔で挨拶をしてくれました。他の人と気軽に話すのが苦手だった僕はブイーとは何度か話すことができました。

ブイーは結婚をしています。奥さんとは結婚して3年が経ち、二人には3歳の女の子がいます。

ブイーは日本はなんでも便利だと言いました。特に24時間営業のスーパーがいいと言いました。その代わりにたくさん働いたら、たくさん払わなきゃいけない税金は嫌だと言いました。

僕はブイーにベトナム料理が好きだと言いました。その中でもフォーが好きで、渋谷によく行くベトナム料理のお店もあると言いました。

ブイーがベトナム料理を食べに渋谷まで行くのかと僕に聞いたので、僕はそうだといいました。ベトナム料理を食べるためだけに渋谷まで行ったことはないですが、そうだといいました。

後でインターネットで調べたら、そのお店はベトナム料理のお店ではなく、タイ料理の専門店でした。僕はそのお店には3回くらい行きました。

ブイーは焼肉が好きだと言いました。友達と焼肉のお店をいくと3900円の食べ放題を頼んでいると言いました。彼はたくさんは飲めないから飲み放題は頼まないと言いました。

ブイーはお肉を食べ終わったら、その後はいつもビビンバを頼んでいると言いました。僕にビビンバは韓国の食べ物かと聞いて、僕はそうだと答えました。僕はブイーがビビンバが韓国の食べ物だと知った上で聞いてくれたのではないのかと疑問に思いました。

僕はブイーに子供との初めての外出のことを覚えているのかと聞きました。ブイーは思い出そうとするジェスチャーをしてまもなく、苦笑いをしながら思い出せないと言ってくれました。

そうですかと僕が答えた少しの後、子供との初めての外出の日、ニンニクと小さいナイフを持って出かけたことは覚えていると言いました。

僕は驚きながらブイーにどうしてニンニクと小さいナイフを持って出かけたのかと聞いたら、ブイーはベトナムではお化けに子供を奪われないように初めての外出の時はニンニクと小さいナイフを持って出かける風習があると教えてくれました。

ブイーはお化けを見たこともないし、信じでもないけど、万が一のために持って出かけたと言いました。

どうしてニンニクと小さいナイフなのかは聞けませんでした。僕はドラキュラのことを連想しました。

僕はその風習とブイーの答えがとても面白いと思いました。

ブイーの奥さんは最近、会社の勤務時間を2時間延長することにしたと言いました。そうになると保育園でも子供を預ける時間も延長しなきゃいけないから、保育園と相談をする予定だと言いました。

ブイーと話をしていると彼はしょうがないからという言葉は何度も言っていました。僕は彼がしょうがないからという口癖を持っているように感じました。

僕はこの文を書いていくらしらないうちに、この文は作為的なのではないかと短く考えました。

18) 石とその下の虫

数年前彼女から、彼女の父について、話を聞いたことがある。彼女の父はとても元気だったけれど、彼女が高校生の時、突然なくなったと言った。正確にどういった病名、あるいは事故などによって父がなくなったかはおそらく聞いていない。彼女が僕にそれについて話をしてくれたのかは、記憶が曖昧だ。

彼女の実家には庭があって、その庭には一本の木があったと言った。そして彼女の父は、その木を何らかの理由で切ったと言った。

その木が切られてから間もなく、彼女の父は死んだと言った。間もなくという時間は、どれくらいだったのだろうか、彼女はその時間について話したのか、いやそうでもない気がする。

彼女の家族は、彼女の父の葬式のため、お坊さんを家に呼んだと言った。そのお坊さんは、家の庭を見回し、木がなかったのかと、彼女の家族に聞いたと言った。驚いた家族は木が一本あったが、彼女の父が、それを切ったと伝えた。お坊さんは、その木が切られたせいで、彼女の父は突然なくなってしまうことになったと言ったと、彼女は話してくれた。

彼女自身は、普段迷信などに興味がなかったけれど、そのことをきっかけに色々考えが変わったと言った。その後彼女は美術をやり始め、僕が彼女に会う時は彼女はいつも堂々として見えていた。彼女が大学を卒業した、何年かのあと、久しぶりに会った彼女は、自分の作品に自信がなくなってきたと僕に言った。

その会話が彼女との最後で、その後僕はまだ彼女と話していない。

何日か前、街の銭湯にいった僕は、こういうことを考えた。そのお坊さんが偶然に彼女の家の前を歩いて、切られる前の木を見ていたのだったら？

それがなぜか記憶に残り、そしてまた、偶然に、彼女の家族から、葬式の依頼が来たのだったら？ 家族の信頼を得るために、木と彼女の父の死を結びつけて、作り話をしたのだったら？

しかし、お坊さんも知らない内に、実際木と彼女の父の死に直接的な関係があったのだったら？ どうして彼女の父は、木を切ったのだろう。

短い時間だったけれど、こう想像しながら、自分がまるで何かを発見したような気分になって、しばらくウキウキしていた。

僕は誰かが僕の行動の結果について、その行動の理由を聞かれると困るのに、他人の理由については、気軽に知りたがるようだ。でも時々それが、自分だけではない気がする。こういったことの全てが誤解だと思うと、なんだか少しわかる気がする。

19) 浴室のカビ

インディゴ色の半袖シャツと、その中に白い半袖を着ていた男は、自分をことをキュレーターだと紹介した。

僕は、胸のところに白くて大きいナイキのロゴがある、青い色の半袖ティシャツを着ていた。そのティシャツは好きで買ったけれど、最近ではこればかり着ているのかなど、思っているところだった。

彼は僕に、どうして絵を人に見せたいのかと聞いた。どうして制作をするのかも聞いた。

僕は彼の質問に、答えつつもりだったけれど、彼にとっては納得できるような答えにはならなかったようだった。少しイライラする彼の顔が見えたと思う。彼も僕も困っていたと思う。

僕は少し微笑んだり、軽く冗談でも言えたら良かったと思う。あんまり深刻に考えるふりせず、あんまり深刻な顔なんかしなくても良かったと思う。

なんだかこういうことが、何回かあった気がする。

質問に答えるのは、いつも心地よくない。わからないと言いたい。沈黙したい。

時々人々は、嘘をついてると思ってしまう。浴室のカビのようなものだと思う。

今度またそのキュレーターに会えたら、僕は彼が満足できるような答えができたらいいと、今は思っている。

今朝はバターで焼いたバゲットとブルーベリージャム、そして蜂蜜と胡椒をかけたスクランブルエッグを食べた。そして牛乳も。その後はキウイとブルーベリーも食べた。